

医学生と教養

医学教育においては、職業人としての医師に必要な能力のうち、診療と技能以外の部分は、プロフェッショナリズムという概念でまとめられている。医療倫理や協調性、責任感、誠実さ、謙虚さ、勤勉さ、利他の精神など色々な要素がプロフェッショナリズムに含まれ、医師の人格的なものを指すものかもしれない。その基盤となる考え方は利他の精神とされるが、医師としての人格を継続的に磨き、人間として成長していくためには、教養をつけることが重要である。このような教養を磨くためには、さまざまな人々との出会いの中で人生の経験を積みながら、読書の習慣をつけて、多くの本を読むことが有用と考えられる。

私は、医学部を受験する前に、小説があまり得意ではなかった。おそらく、多くの人間の心情を理解する能力に乏しかったのであろう。しかしながら、受験科目の国語の得点力を向上させるために、浪人をした時に、片道 1 時間かかった電車通学の時間を利用して、小説を読むことに決めた。名作と言われる日本や海外の小説を読んでいった。小説を少しずつ、何冊も読んでいるうちに、自然に国語の学力は向上していった。そして、それ以上に私の読書に影響を与えた特筆すべきことがあった。予備校の授業で、読書の重要性を強く訴えられていた講師がいた。あまりはっきりと記憶していないが、ヒトが成長していくためには、とにかく読書を多くすることが重要だというような趣旨だったと思う。なぜそれが私の心に響いたかはよくわからないが、おそらくその講師の信念とスピーチ力が影響したのかもしれない。それ以降、読書への意識は私の心に固く刻み込まれた。現在に至るまで、文学、生き方、哲学、宗教、科学、歴史、地理、雑学、芸術、生物、宇宙、医学、など全てのジャンルの読書を、その時に遭遇した問題点の解決法探しや好奇心の赴くままにやっていく習慣がついた。実際は、読んだことは次々と忘れていってしまうように思えるが、実は潜在意識に深く刻み込まれているのかもしれない。医師としても教員としても一人の人間としてもこれまで多くの問題点と対峙してきたが、これらの多くの読書は、教養として潜在意識に刻み込まれ、医療、教育、研究の現場、問題解決や人生を楽しむことに生かされてきたことと思う。

そうすると、どのような方法で読書をするのが良いかということになる。読書には、精読と速読がある。基本的には、本のジャンルや必要性により、精読と速読の要素を適切に組み合わせて読書をする。読書パターンには、習慣的に行う読書と、必要性に駆られて行う読書の 2 パターンを行なっていく。習慣的な読書においては、自分の得意な分野であれば速読パターンになるし、難解な本、内容をしっかりと身に付けたい本、新鮮な内容として興味を持った本については、精読の要素が強くなる。必要性に駆られて行う読書は、短時間で多くの本を読まざる

を得ない場合が多いであろう。その際には、速読を基本としながら、キーワードを探して大事な部分はしっかりと精読し、場合によっては、内容を抜書きする必要も出てくる。医師は、さまざまな人生や難題に接する機会が多い。さまざまな経験を活かしながら、前に述べたような読書を継続していくことが、医師としての教養を身につけていくには重要なことと考える。